

「室蘭らしさ」を後世に

室蘭市 蘭歴建見会

国道 36 号線を札幌から 3 時間ほど車で走ると時の刻みを積み重ねてきたように薄茶色になった街並みが見えてくる。明治の開港以来、工業都市として発展し、「鉄のまち」と言われた室蘭だ。現在は人口 9 万人ほどの街だが、かつてほどではないにしても今でも鉄の城下町としてその輝きは失せていない。

この室蘭地域の歴史的建造物を調査、活用、保全する事業を行い、歴史の風化を防ぐとともに教育や観光の資源として魅力あるまちづくりに寄与することを目的にしているのが、市民団体「蘭歴建見会(らんれきけんけんかい)」だ。

発足したのは 2013 年 7 月。会員は、正会員、賛助会員あわせて 15 人。中心メンバーは、室蘭工業大学の助教、観光ツアーガイド、市議員など、建築や観光に関心を持つ 8 人。活動資金は、会員からの年会費 1 人 1000 円と公益財団法人北海道地域活動振興協会の平成 25 年度地域活動支援連携事業に採択されたことによる助成金。

代表は 1 級建築士で室蘭市出身の吉田幸恵さん。室蘭で生まれ育ち、高校卒業後に大学進学のため関西へ。進学を決める時期が自宅の新築と重なったこともあってインテリアに興味を持ったという吉田さん。

その分野での進学を希望したが、インテリアだけの学科がなかったため建築学科を選んだ。大学卒業後の 3 年間は関西で就職、結婚・出産を機に退職し室蘭から移った登別市の実家に戻り、2 人の子供の子育てをしながら 1 級建築士の資格を取得した。個人で建築事務所を開いたものの「自分の視野の狭さや知識不足を痛感した」と吉田さん。「色々な場所に行って、沢山の人と出会って建築への興味をより深めたいという気持ちになりました」と言う。



街歩きイベントで路地裏も歩いた

■ 故郷に物足りなさを感じていた

子供時代

老朽化した建物の大部分を再利用しながら、用途変更などを行うリファイン建築を行う建築家の青木茂さんの講演会を聞いたことで古い建築物にも興味の幅が広がっ

た。「古い建物を壊して、新しく建て直して
いくだけはいけないなと感じました。建
築の仕事では、地元の材料で地元らしい建
物を造ろうという動きがありますが、室蘭
らしさとは何かを明確に答えられるものが
自分の中にはなくて、それを探したいとい
う思いもありました。いつか室蘭らしさを
残せるような活動をしたいと思った」と吉
田さん。



ガイドの解説に熱心に聴き入る参加者たち

3月に行われた「ぶらぶら室蘭 2013」(主
催：室蘭観光推進連絡会議)に参加したこ
とでその思いはより強いものになった。こ
れは参加したい人が気軽に集合場所に集ま
り、古い建物を訪ね歩くことで、港まち室
蘭の魅力を再発見する街歩きイベント。そ
の時に、室蘭市の蘭西地区といわれる商家
や商店街など古い街並みを歩き、改めてそ

の良さを知ったという。

子供時代はその良さがわからずいつも
物足りなさを感じていたそうだが、時が過
ぎ自身も年齢を重ねたこともあって街並み
が発する息遣いのようなものに触れること
ができたそう。外から移り住んだ人たち
の話を聞くうちに地元愛が芽生え、「子供を
育てていると山にも海にもすぐ行けて、買
い物も不自由なくできるこの環境がとても
恵まれていることに気づきました」。

今なら室蘭の魅力は？と吉田さんにた
ずねてもすぐに答えることができる。「ある
人に言われて気づいたのですが、海と山が
一度に見える独特の地形が私には一番の魅
力だと思います」

■ 街歩きイベントに

応募数をこえる参加者

SNSのフェイスブックでつながりが
あり、同じような市民活動に熱心だった現
事務局長の三木真由美さんとやりとりして
いるうちに意気投合、そこから活動が始ま
った。

9月には、絵や写真で記憶に残す室蘭歴
史的建造物アートプロジェクトを開催。歴
史的建造物の絵画や写真、映像などの作品
を市民から公募した。応募数は7人から5
0点ほど。作品は併せて開催されたむろら
んカルチャーナイトの会場で展示された。
作品としては写真が多かったが、中には、
ボールペンだけで建造物や風景を描いた作
品、昔あった古本屋に寄せたエッセーなど
個性的なものも。

吉田さんが会を設立するきっかけとなった「ぷらぷら室蘭 2013」の第 3 弾は室蘭観光推進連絡会議との共催企画で開催した。

11 月 2 日の当日には、募集人数 30 人のところ小学生からお年寄りまで幅広い年齢層の男女 62 人がスタート地点の旧室蘭駅舎に集まった。青空がのぞく秋晴れの中、北海道大学名誉教授・NPO 法人歴史的地域資産研究機構代表理事の角幸博さんらによる解説つきで、今も明治・大正・昭和時代の古い建物が現存する中央町・海岸町界隈を巡った。

若林金物店や三ツ輪商会倉庫、旧丸越山口紙店など古い趣がある建物を色々な角度から一眼レフカメラで撮影したり、解説を熱心にノートでとったりする人もいた。

民家の間の狭い路地裏に入ったり坂道などを上ったり、参加者は 2 時間かけた街歩きにも疲れをみせる様子はなく、市内在住の 2 人組の女性からは「ここ映画館だった？以前は病院だったよね。すごくいい建物だったのに壊されてもったいない」「空き家が多くなったね。しばらく歩かないと何があったか忘れる。こうして街中を歩くのはいいね」との声も聞かれた。街歩きの後には講演会「守ることは創ること」が開催され、様々な歴史的建造物の保存までの秘話などが前述の角さんから紹介された。

同月 30 日には、帝国ホテルの建築にも携わり北海道を代表する建築家である田上義也氏が設計した室蘭ユースホステルの見学会を行った。1972 年に開業されたこのユ

ースホステルは、イタンキ浜を見下ろす高台に建ち、船をイメージさせる外観と白い壁が特徴。見学会では、参加者 30 人を藤当満ペアレント（支配人）が案内した。

この建物を含め、旧室蘭駅舎や栗林商会の蕙山苑なども吉田さんお勧めの建物だそう。



室蘭市旧室蘭駅舎は市の歴史的建造物

こうした建築物に関する勉強会のほか、今後も、街歩きイベントやアートプロジェクトを続け、そこで会員を募ったり、地元の人々との交流を図る考え。古い建物を利用して地元の著名な音楽家によるコンサートも開催したいという。

「古い建物を壊し、画一的なチェーン店が建てられてしまうと、どこに行っても街の顔が似通ってしまい室蘭らしさがなくなってしまいます。室蘭の繁栄を支え、ここに住む人々を彩ってきた建物を残した街づくりを市民の方と一緒に進められるような団体にしたい。また、残したいような古い建物をみつけたときには、一度私たちに相談していただければ嬉しいです。時代を見つめてきた建物がただ壊されるのは残念

です。何か新たな価値を見出して別の使用方法などをアドバイスできるようにしたい」と吉田さん。

をもたらし愛郷心を育むことに繋がっていか



室蘭歴史的建造物アートプロジェクトでは作品を旧室蘭駅舎に展示

室蘭を訪れた観光客だけでなく室蘭を愛する市民に対して、会員一人ひとりが建物の謂れ(いわれ)や価値について説明できるようにして室蘭の活性化につなげていく考えだ。

11月の街歩きイベントの参加者は、ほとんどが市内在住の人たちだった。まず地元の人に自分たちの街の魅力を再発見してもらうことが第一歩。そのうえで、市民自らがその魅力を発信していくことが大切だ。

セピア色の室蘭の街は時刻によって色を変える。夕暮れのオレンジ色だったり、ライトアップされた工場群の白い光芒だったり。歴史的な建造物の数々は様々な色に溶け込みながら、じっとそこに佇んでいる。鉄の時代の先導役となった室蘭に往時の面影はないにしても、過去を知ることは未来を切り拓く鍵になる。蘭歴建見会の地道な活動の積み重ねは、そこに住む人々に潤い



■ 連絡先

〒050-0072 室蘭市御崎町 2-9-23

蘭歴建見会

代表 吉田 幸恵

問い合わせ先

事務局長 三木 真由美

TEL : 090-7519-9237

FAX : 0143-23-0165

Email : mayumi_nakayama@nifty.com

URL : <https://www.facebook.com/muroranrekiken>